実体験的学習の実感から支援活動をし、 与えて与えられた私たち

はじめに

このレポートは私が本校に赴任してから昨年までの5年間の活動です。

- ○平成17・18年度(5・6学年担任)
 - (ストリート・チルドレン宿泊体験・児童労働体験・マラウイ共和国援助・衣類援助 ・チャリティー喫茶店・募金など)
- ○平成19・20年度(5・6学年担任)
 - (ストリート・チルドレン宿泊体験・東ティモール援助・イラク援助・衣類援助・チャリティー喫茶店・募金など)
- ○平成21年度(4学年担任)(チャリティー喫茶店・バングラディシュ支援・募金など)

主な活動

- 1, 海外貧困問題を知り、学級講演会・映像視聴など学習活動の開始
- 2, 実体験的学習
 - ①ストリート・チルドレン宿泊体験
 - ②児童労働体験
- 3, 二つの体験から考え出して実施した支援
 - ①衣類援助
 - ②マラウイ共和国支援
 - ③東ティモール難民キャンプ支援
 - ④イラクの子ども支援
- 4, 支援のための資金作り
 - ①アルミ缶集め
 - ②太陽熱利用チャリティー喫茶店
- 5, 「あるべき援助」について考える
- 6, 意欲を持続させるための取り組み
- 7. 子ども達の意識・価値観の変化

(写真資料はまとめて巻末)

概要

- ○海外の貧困の厳しい実情を、本や映像・学級講演会等で学ぶ中で、子ども達の発案からその 実感を理解子するためにストリート・チルドレンと同じように学級全員で屋外に一晩泊まっ てみた。予想以上に厳しい実感から子ども達は寒さ対策のための衣類支援活動に乗り出した。
- ○支援のための資金集めとしてアルミ缶集めと共に、太陽熱を利用したチャリティー喫茶店を 開いた。学校で作った太陽熱利用湯沸かし反射板でお湯を沸かして参観日に喫茶店を開いて、 客として来てくれた父母等に飲み物を出し、活動の願いを聞いてもらい、協力を訴えた。
- ○学んだ映像の中の「働く子ども」や「ストリート・チルドレン」が貧しい衣類を着ているのを見て、子ども達はまず「衣類を支援したい」という願いを持ち、資金集めと衣類集めを工夫し、NGOを通じて衣類を海外の貧困国に送った。しかし、支援した相手の反応になかなか接することが出来ないという課題もあった。そこでその課題を克服するために、担任の私が「JICA教師海外派遣プログラム」を利用して子ども達の願いである援助物資を直接アフリカのマラウイ共和国に持って行った。また、このマラウイ共和国の青年海外協力隊員の方が現地の生徒と作っている「ビーズブレスレット」を地域の国際広場で販売し、マラウイ・ルウェレジのエイズ孤児を支援すると共に、静岡の吉原商業高校と提携し、現地に「エイズ予防保健センター」設立の協力をした。また、次の担任時は学年3クラスで取り組み、NPO「地球のステージ」の医師Kさんと共に私も東ティモールの難民キャンプを訪問し、サッカーのための用具を学年で支援し、同じくその反応を子ども達に持ち帰った。
- ○アフリカ・マラウイ共和国に援助物資を持って行った時は、ある小中学校では「依存心の元になるから」と受け取りを断わられ、「援助は良いこと」と考えていた子ども達が、「物質

援助は必ずしもいいとは限らない。どうしてだろう?どうしたらいいんだろう?」と壁にぶっかり、「あるべき援助とは何だろう」を学級全員で学び、話し合って考えた。

- ○この活動を続ける中で、地域の方々からはアルミ缶集めの際に応援され、衣類援助の運送屋 さんからの親切を受け、この問題に取り組むミュージシャンの曲からも意欲を与えられた。
- ○これらの活動を行うことで、子ども達は自分の価値観が変わったり、クラスの約束事が出来 たり、すさんでいた子が穏やかになったり意欲を発揮したり、学級のお互いの結びつきが強 まって団結するなど、他に「与えようとした自分たちが与えられた」という体験をした。

学習活動のねらい(担任の願い)

- ○「この現実を何とかしたい」という思いを強めながら行動を積み上げて行ける。
- ○こういったことを自分と同じように大事だと思って共に取り組む仲間と、思いを 共にして「一体感」を持ち、強め、思い合える集団を作っていける。
- ○この日本社会の物や刺激に翻弄されがちな状況から抜け出して「思いやり等の人 として大事な感情」の大切さに気づき、それを大切にし、深めていける。

1,海外貧困問題を知り、学級講演会・映像視聴など学習活動の開始

(1) きっかけをつかむ・・・・「朝の1分間スピーチ」 (平成17年度) 毎朝の朝の会で、日中間の問題を発表した子をきっかけに、戦争の悲惨さや子どもの被

毎朝の朝の会で、日中間の問題を発表した子をきっかけに、戦争の悲惨さや子どもの被害の調べ発表が続いて行われた。子ども達の関心は「大変な子ども達」に行き、「戦火の中の子ども達」から「貧困国の大変な子ども達」へと発表と関心が移っていった。

- (2) きっかけをふくらめる・・・愛知万博『フランス館』の利用(平成17年度) 長野県の5年生は臨海学習があるが、その頃ちょうど開催されていた「愛・地球博」を急 遽計画に入れた。下見に行き、海外貧困問題の願いに沿った映像を大型映像で見ることが 出来た「フランス館」と、環境問題を扱っている「日本館」を計画に入れた。
 - ○一つは「日本館」「フランス館」両方での地球環境問題の深刻な状況の解説。
 - ○もう一つは貧困の中にある子ども達。「働かざるを得ない子ども」の過酷な労働の様子。 そして担任が一番見て欲しいと思っていた「ストリート・チルドレン」の映像。画面に 出てきたストリート・チルドレンは最後に泣きながら「僕なんて誰にも愛されない!」 と言う。この映像は子ども達に強い印象を与え、帰校後に子ども達は「あまりに自分た ちと違いすぎて、驚いた」「何とか出来ないのか」などの感想を書いた。

(3) どんな活動がしてみたいか考え合う

ここまで、様々な情報を持ち寄って見合ったり、愛知万博という大きな場でも刺激を受けた子ども達に、「ここからどんな活動をしてみたいか」と問いかけ、学級全体で今後していきたいことを考え合った。

子ども達が考え出したことは、更にもっと知るための「学ぶ活動」、自分たちが何かを してみる「体験活動」、相手への「支援活動」、また他に知らせ広めるという意味での「ア ピール活動」だった。

(4) 学ぶ活動

- ①フジテレビ『世界がもし100人の村だったら』をみんなで観る 【写真1】
- ◎ "一発で分かる"映像のインパクトの強さ 【写真1】

学級の子がこの番組のことをクラスに報告した。そこで録画を入手して学級みんなで 観てみた。民放番組で、情報偏りにならないように担任も調べ、解説をした。

*家族のため「死の粉塵の炭坑」で8時間働く10才・11才の男の子の映像(南米) *母の治療費のためゴミ山の中で毎日ゴミ拾いをする10才の女の子(フィリピン)

◎インパクトの強い映像にショックを受け、思いの深いの感想を書く

○私は普通の生活がどれだけうれしいことなのか分かりました。このことを見て改めて 自分がこれからどうしていかなければいけないか分かりました。あの子達は、あんな 生活で絶望するのではなく、未来への夢を持っていました。だからずっとその夢を忘 れず、追いかけていってほしいし、私もそれを一生けん命応援していきたいです。

- ○ぼくらはこんなにぜいたくで楽な生活をしていていいのか?こんなぼくたちが何ができるんだろうか。そして今、日本がアルベルト君たちに何をすればいいのか?ただ今は考えるのでせいいっぱいだ。アルベルト君たちにもうしわけない。きっと何かぼくたちにできることがある。ぜったいぜったいある。ないわけがない。ぼくはぜったい何かをしてあげたい。ぜったい楽にさせてあげるようにがんばりたい。まずみぢかなところから、次にくらしの中で、次にみんなでできることから始めて、むずかしいこともどんどん取り組んでいこう。そうすればきっと楽にさせてあげられる気がする。そう、きっときっと。(学級の多くの子の共感を得た感想)
- ☆自分と同じ年代の子達が過酷な生活をしている映像は、非常にインパクトが強く、子ども達は本当に真剣な眼差しで観ていた。その後書かれた感想も、「自分の今置かれている立場を今までにない初めての心の視点で見ているような感想を多くの子が書いた。

②『明日こそ子ども達が・・・』を音楽会で(平成17年度) 【写真2】

☆「争いや貧困をなくして明るい明日を作っていくのは子ども達だ・・・」の歌詞の森山良子さんの『明日こそ子ども達が・・・』は子どもの心情にピッタリと合い、「音楽会で歌いたい」という声で子ども達は張り切って練習をし、気持ちを込めて発表。☆曲の持つ勢いもあり曲発表の工夫や「歌詞の調べ学習」も意欲的に進んだ。

- **③「学級講演会」**(平成17~21年度 下記の3つは17年度)
- ◎T先生(長野県看護大学講師・NGO「シャプラニール」所属) 『バングラディッシュの子ども達』 (バングラディシュでの7年間の様子のお話) バングラディシュの厳しい現実と、講師の「よりたくさんもらった人たちは、よりたくさんの責任がある」の言葉に子ども達は影響を受けた。
- ◎ Y さん (駒ヶ根市役所・青年海外協力隊 O B) 『ネパールとそこの子ども達』
- ◎コンゴ人S先生(青年海外協力隊 駒ヶ根訓練所教師)『コンゴの現実』 コンゴの厳しい現実を話して下さった。向こうの子ども達が必要としている物は「文 房具」というお話しから、担任のマラウイ訪問の際の支援物資が文房具に。 (その他18年度~21年度までにも日本人・外国人合わせて6回実施)

④「地球のステージ」講演会の親子視聴 (平成18年度学級)

○駒ヶ根青年会議所主催

(駒ヶ根には青年海外協力隊訓練所があり、「地球のステージ」はそこに定期的に来ている。市役所青年会議所などが中心に「協力隊を育てる会」があり、今回そこの実施)

- ◇海外ボランティア医師 Kさんの感動的なお話・映像・歌でのアピール
- ○親子約50人で参加・・・父母にも活動を理解してもらうチャンスに。
- ◎子ども達の感想
 - ○私は「地球のステージ」を見て、心に何かがささったように、心がいたくなりました。
 - ○貧しい国だと思って見ていると、その国の人はあふれるような笑顔をしていました。人間は笑顔で助け合っているんだと思いました。この「地球のステージ」は くわ山さんとあっちの人で助け合っている姿がとてもかがやかしいと思いました。とてもよかったです。
 - ○Kさんが言っていた、「援助して助けているのではなくて、こっちも助けてもらっている。」というところで「あっ、私達も助けてあげているんじゃなくて、こっちも助けてもらっているんだ」と気づきました。笑顔がすごいと思いました。 貧しいからこそ、私達とはちがう「宝」を持っているんだと思いました。

◎親の感想

- ○「地球のステージ」終わってしばらく声が出ませんでした。音楽と映像が見事にとけあって感動しました。実際に現地の人と交流した 241_手作り太陽電池パネルからさんの澄んだ歌声が心の琴線に触れ、思わず涙がこぼれてしまいました。本当に良い催し物を見せて頂いて感謝しています。
- ○感動しました。言葉にできない素晴らしい時間でした。命の大切さを改めて考えさせられました。あの子ども達の笑顔に救われる思いがしました。 "笑顔は強い"

○今日『地球のステージ』に出席したことを一生忘れることはないと思います。ステージが始まり、Kさんの音楽と映像に目と耳を向けた時、自分の中で感情が一気に変わりました。Kさんの言うように、貧困の中にも涙を見せず一日一日を精一杯生きる子ども達の笑顔を見て、とても胸をしめつけられる思いでした。Kさんが風船で貧困の子ども達とつながったように6年1組だけではなく、時代が変わるように次の時代・世代へとつなげていけたらいいですね。又講演があればぜひ行きたいと思います。

2、実体験的学習

(1) 「ストリート・チルドレン宿泊体験」 【写真3・4・5・34】 (平成15・16年度前任校) (平成17年度 19年度 本校・学級)

前任校では様々な貧困の実態を調べる中で、ある子がストリート・チルドレンの資料を 持ってきた。子ども達もストリート・チルドレンについて調べ、その実態の過酷さに驚き、 その驚きをエネルギーとして援助活動を始めた。そんな中、クラスのある子達が「ストリ ート・チルドレンと同じように泊まってみよう」と言い出した。この意見はその発想の奇 抜さから賛否両論の議論になった。初夏でも長野県の夜はコンクリートは冷る。子どもの 健康度は様々。過酷な条件で寝て、もし病気になる子が出たら。もし、事件等に巻き込ま れたら。普通に考えたら無謀な取り組み。父母や学校関係者の中にも不安の声があった。 担任の私も迷った。しかし私の中にはこの頃ある葛藤があった。私達は海外の貧困問題に どうやったら対等に向き合えるのかと。この先進国の何不自由のない生活の中でする援助 活動とは"自分達のゆとりの部分で行う自己満足"になってしまわないだろうか、という 何か"後ろめたさ"のようなものを感じていた。(そしてこれは子ども達も感じていたの かもしれない。) 私と子ども達は数人の父母の協力もお願いし、「実行」を決めた。前任 校の時はクラス討論を重ねた結果、7月という季節から学校屋外の渡り廊下(露天)にダ ンボールと毛布のみで寝る。食事は「朝晩食パン1枚と水だけ」と決まった。本校の時は やはり臨海学習や調べ学習から関心を持ち、担任が「こういうことも出来るかもしれない」 と話すと、クラス討論で是非やりたいとなった。時期は10月初めで玄関の外と中に分か れて寝た。当日夕方は、パンを食べたり寝る準備をしている間はまだややはしゃいでいた が、いざ寝始めると、7月・10月初めといっても長野県も屋外の夜のため、ダンボール の下のコンクリートの堅さと外気の冷たさが徐々に子ども達の体に伝わって来た。何度も 寝返りをうったり、一旦寝ても起き出す子ども達の顔からは最初の"お泊まり気分"の表 情は消えていった。朝の起きて朝食のパン1枚を食べた子ども達が書いた感想は次のよう なものだった。

「痛い・寒い・眠れない」

「たった1枚のパンがいつもよりずっとおいしく感じて驚いた。」

「布団がこんなに大事なものだとは思わなかった。」

「寒くて怖かった。家に帰りたかった。これで帰る家がないなんて・・・・。」

「こんなことを続けたら病気にかかって死んでしまう。ここより危険なところで寝ているなんて信じられない。」

「なんか不思議な感覚でした。このダンボールをもらうだけでもストリート・チルドレンは苦労していると思うと、自分がこの状態でねていられるのは幸せということに気がつきました。とても大変なくらしだと思いました。自分たちがやったことは絶対ムダにならないと思います。このきちょうな体験をムダにしないで、こうやって生きている人達に何かできることはないか考えていきたいです。」

「食事というのは本当にどれだけ大切なものかと思いました。」

※これは非常に強烈な体験といえると思われる。

実際、長野県の夏・初秋とはいえ夜中の屋外は冷え込み、その上コンクリートの堅さは段ボールを通して体に伝わり「寒い・寒い・眠れない」という三重苦という感じだった。これはよく眠れてしまったら失敗、よく眠れなかったら目標達成という、普通とは逆の体験となった。子ども達はこの一晩で「ストリート・チルドレン」と言葉で言うのは簡単だけど、その実態は自分たちと途方もなくかけ離れた大変さがあることを文字通り「身をもって」実感した。この体験とその実感理解の影響は大きく。その後の「支援活動」への覚悟の堅さと意欲の持続に一番大きな影響を与えた。

(2) 「働く子ども体験」(平成17年度 学級) 【写真6】

きっかけはTV『世界がもし100人の村だったら』の児童労働を見て。「あまりに自分と違う生活」を知った驚きから「自分の生活」の見返しを始め、「あの子達ほどでないにしても"働く"体験をしてみたい」とクラスの意見はそろった。そこで、"働かせてくれるところ"も自分たちで探し、父母の勤め先から探し出し、

- ①「ふれあいセンター」で花壇整備の草取り「2時間半休みなし」で、また
- ②「県成人授産施設」で田んぼに切った藁まき「2時間休みなし」で行ってみた。

◎「実体験・・・・子どもの実感を深める。」

☆「きつい!」「見るとやるとは大違い」「8時間働く子どもなんて信じられない」

※ 2時間半でも「休みなし」の労働はかなりバテたようだった。働くことがどれだけ大変か、自分の体で身をもって分かった感じが見て取れた。この体験も児童労働の子達への理解と、その後の活動のエネルギーになっていった。

(3)子ども達に生じた変化

この体験を経て子ども達にはある変化が現れた。支援資金のためのアルミカン集めでそれまで40分もすると「疲れた」と言う子もいたのが、この体験後、誰一人として一切弱音を吐かなくなった。「一晩だけでもあんなに大変だったのに、同じ年齢でそれを毎晩している子達のためにする活動で弱音なんか吐けない」と思ったのだろう。

3, 二つの体験から考え出して実施した支援活動

(1) 衣類援助(平成17・18年度学級 19年度学年) 【写真7・8】

学んだ映像の中の「働く子ども」や「ストリート・チルドレン」が貧しい衣類を着ているたことも印象にあったが、子ども対は何よりも「ストリート・チルドレン宿泊体験」をした晩、夏や初秋でも何枚かの衣類を着ていても「寒かった」ことに実感として驚いた。「衣類がなければ夜の寒さで病気になって死んでしまう」と感じた子ども達がまず「衣類援助」を選んだのは、自分たちの体験的実感から生まれた必然的で切実感のある決定だった。衣類はどうするのか、送る資金は?といった問題を子ども達は真剣に話し合い、試みていった。

衣類は自分の親宛に「お願いチラシ」を書き、それを元に子どもが親や近所・親戚・隣のクラスなどに協力を求め、2年間に3回で合計「約400kg」の衣類をNGOに送った。担任が見ていると、子ども達はこの「衣類発送」の時一番嬉しそうな表情を見せる。それはたぶん「自分たちのような小学生でも、海外の貧困問題のために少しでも働きかけることが出来たんだ。」という達成感と喜びを感じ、自分の中の前向きなエネルギーと思いを信じられたからだろうと思われる。(NGOは大阪・神戸(倉庫)の「日本救援医療センター」)

◎実支援の達成・・・・子どもに満足感と自信を与える (子どもの感想)

- ○「送れてやっとしえんができた。うれしかった。」
- ○「衣類を送り出したときの気持ちを大切にしたい。」
- ○「この衣類で寒くて困っているストリート・チルドレンが何人も助かると思うと、やって良かったなぁって思う」

(2) アフリカ・マラウイ共和国への支援 (平成18年度 学級)

①マラウイ共和国に援助物資を届ける 【写真9・10】

子ども達と行なった支援活動の課題の一つに「相手の顔が見えない」ということがあった。この打開策として担任の私が「支援物資」を届け、その反応を持ち帰ることにした。 J I C A の「教師海外研修プログラム」に担任が応募し、その書類選考に通ったこと知らせた時、学級の子ども達は自分達の支援物資が直接届き、反応も見られるということで大喜びした。

「支援物資」はサンバさんの講演でのお話から「文房具」「サッカーボール」とし、受け取ってくれた相手の表情をアフリカから写真やビデオで担任が持ち帰り児童に見せた。

◎支援した相手の反応・表情は・・・・自分を見返させる

○「鉛筆やボールペンやサッカーボールをもらうとき、みんな笑顔で手をたたいている人もいました。マラウイの人達は大切に使ってくれると思います。それを想像するだけで心があたたかくなります。自分達がやってきたことで誰かが喜んでくれることは自分も

うれしくなります。今回、喜んでくれた相手の表情を見られて本当に嬉しいし、これから援助していくとき、今よりもっとがんばれると思います。」

- ○「喜んでくれている写真を見て、私達先進国にいる人は何かを始めなければいけないんだ!と強く思いました。私達にはない"笑顔"だと思いました。この笑顔が消えていくのは本当にもったいないことです。だから私は、卒業しても大人になってもずっとこの活動を続けていきたいし、こんないい笑顔を持っている子達が満足できるまでしっかり生きていて、この笑顔が世界中に広がってくれればいいなと思いました。」
- ○「鉛筆1本を喜んでくれる写真を見て、すごいな~と思いました。これからもっと物を 大切にしたいと思いました。」
- ○「あの笑顔を見て、日本の子どもがどれだけゆうふくかも分かりました。」
- ○「マラウイの人を見習って僕も文房具を大切に使いたい。」
- ○「逆に支援した僕たちがうれしかったです。写真でマラウイの人達の顔を見て、心が温かくなったような気がしました。大人になったら働いたお金でもっと援助したいです。 地球に生きる何十億というみんなが幸せに生きていけるようにしてみたいと思いました。」
- ○「援助のための費用を用意するのにアルミカン集めをしたりして、とても大変だったけ ど、この活動をしてマラウイの人達の笑顔につながったのでよかったです。」

☆後の記すように、「物質援助」は相手の自立心への阻害や、「支援というものがそういうものでいい」という固定観念に陥る可能性など様々な問題点がある。しかし、この相手の反応に接した場面では、この発達段階の子達が「自分の持った思いや問題解決への意欲や熱意を深め、強めると」いう意義があるように思われる。また「自分も物を大切にしたい」という、自分の生活感覚を見直すことにつながっている点も収穫だった。

②その他のマラウイ共和国学習 【写真11・12・13】

支援物資を届けるだけでなく、担任が撮ってきた写真で「フォトランゲージ」を行ったり、マラウイについて調べて「マラウイボックス」(現物を見る)、「貧困の輪」等のアクティビティーを行い、担任が持ち帰ったマラウイの主食であるトウモロコシを粉にした「シマ」を煮て調理し、食べてみるなど、訪問資料を生かした学習を様々してみた。

③ルウェレジ中高等学校への「エイズ孤児支援」 【写真14】 〜ルウェレジ中高等学校生徒が作ったビーズブレスレットを販売〜

- ○駒ヶ根市「国際広場」への出店要請を受けて、ブースを出し、「貧困クイズ」と「活動 の紹介模造紙展示」に合わせて行った。
- ◎担任が訪問したマラウイ・ルウェレジ中高等学校ではエイズ孤児が増えていた。そこに 赴任していた青年海外協力隊の尾崎隊員は、エイズ孤児となって学校に来られなくなっ た友達を学校に呼び戻すためにそこの生徒と共に「ビーズブレスレット」を作っていた。 訪問時にこの活動と提携の可能性を考えた担任がそのブレスレットを持ち帰って子ども 達にその話をしたところ、子ども達はチャンスがあったら売りたいと希望を持った。

ちょうど、駒ヶ根市の国際広場でのブースの誘いがあったため、共にマラウイに行って同じように販売をすることになっていた静岡の吉原商業高校と協力をしてマラウイの 尾崎隊員からビーズブレスレットを届けてもらい、販売。ビーズブレスレット「90個」 を18000円で完売し、マラウイ・ルウェレジの尾崎隊員に届けた。

④マラウイ「VCTセンター」建設とTV会議 【写真15・16】

マラウイ支援で提携した静岡の吉原商業高校の部活チャレンジショップ「吉商本舗」の活躍のお陰で本学級と吉商本舗で合わせて20万円(本学級は2万円余)でマラウイのルウェレジに「エイズ予防センター(VCTセンター)」が完成した。この完成の記念に「マラウイ」-「静岡」-「駒ヶ根」(本校)をネット回線で結んで「TV会議」をした。これは県と国を超えて会話できたことでつながりの手応えと今後の活動への励みになった。

(3) 東ティモール支援(平成19年度 学年3クラスで)

【写真17・18・19】

この年、5学年3クラスで「貧困支援学習」をスタートした中で、担任(原)がNPO法人「地球のステージ」のスタディーツアーでK医師と東ティモールに(7/26~8/3)行けることになり、そのことを学年に話すと「支援したい」ということになっり、Kさんと連絡を

取る中で難民キャンプの子達にサッカーを教えるため、支援物資が「サッカーボールとビブス」 と決まった。子ども達がアルミカン集めで貯めた支援金の中から買って持っていった。

この学年でも海外の事情をビデオで観て、その衝撃からユニセフ募金や衣類援助を始めていたが「相手の反応が見える支援」として初めて"特定の相手への支援"となった。

夏休みに行って相手の反応をビデオに納めて来て見せた。子ども達の感想は、

- ○私達ががんばってアルミカン集めをして買った「ビブス」と「サッカーボール」を使っ てくれて、とてもうれしかった。なん民キャンプの子ども達は、私達のようにいつも遊 べるような感じではなかったから、そうとううれしがっていて、私達の方もうれしくな った。東ティモールで木でサッカーゴールを作ってくれた現地の大人の人、心配してく つを買ってくれた人達には感謝したいです。これからも、出来ることはやっていきたい です。服も無事に届くといいです。
- ○私は夏休み中に東ティモールの人達がちゃんと私達で買ったボールとビブスでサッカー を やってくれるか心配だったけど、今ビデオを見てすごくうれしくなりました。
- ○その後、こういった国への"医療援助"の意味を考えるために、担任が現地で撮ってきた医療現場の映像とK医師の「インタビュービデオ」で、「医療とは?」「ボランティアとは?」について深く考え合う学習をした。

(4)紛争国イラクとその国の子どもへの支援活動学習 (平成19年度学年全体) ①Nさんの講演会を企画 【写真20・21】

県内千曲市在住で、松本市のNGO「JIM-NET(日本イラク医療支援ネットワーク)」に所属しているNさんとい方の情報を学年の子ども達が調べてきた。ちょうど駒ヶ根市に来られるということだったので講演会をお願いし、「イラク・ヨルダンをはじめとした紛争国とその国の子どもについて」という題の講演を学年3クラスでお聞きした。Nさんはイラク戦争の劣化ウラン弾などで被害に遭い、ヨルダンに逃れて病院に入院している子ども達の支援をしておられた。イラクの子ども達の大変な様子に児童は熱心に聞き入った。講演会で「現地の子ども達は日本からの"がんばって"という絵や作品をとても喜んで大事にして、元気づけられている」というお話をお聞きし、学年の子達も「その支援をしたい」とNさんに伝え、支援活動をすることになった。Nさんと相談した支援内容はA、絵手紙各自2枚・・・・現地のNさんに送って現地のカレンダーと組み合わせ、

・・現地のNさんに送って現地のカレンターと組み合わせ、 「絵手紙カレンダー」にしてもらい現地の子ども達に届けた。

B、貼り絵各自1枚

C、習字各自1枚 学年90人で計360枚をヨルダンに発つNさんに預けた。

- ◎子ども達が絵と共に届けたメッセージ
 - ○苦しいと思うけど、元気でがんばってね。 ○応援してます。 ○ファイト!ネバー・ギブアップ! ○笑顔を忘れないで。 ○がんばって
 - ○僕達がいっしょうけんめい描きました。 ○この絵を見てがんばって下さい。
 - ○苦しいかもしれないけど、がんばって下さい。
 - ○イラクの人達の事を考えていっしょうけんめい心を込めてがんばって作りました。大事 に持っていて下さい。
 - ○元気になってもらうように、喜んでもらえるように、気持ちを込めて、心を込めて作りました。
 - ○ぼくは桜の木をとてもがんばって描きました。その桜の木を見て元気になってほしいです。そして元気になったら、大きな夢を持ってほしいです。
 - ○僕は希望を持って欲しいです。毎日貧しい生活をして希望をなくしている人がいます。 だから僕達が描いた絵で希望を持って欲しいです。
 - ○私は自分たちの絵や習字を見て、イラクやヨルダンの子ども達が「よしっ!!明日もがんばっていこう」と元気になって明日に向かって生きていてくれたらすごくうれしいなぁと思います。病気で希望・勇気が出ない子ども達がその絵を見てよろこんでくれたらいいです。
 - ○とてもていねいに描けたので、イラクの子ども達はすごく大切に取っておいてくれたらいいなと思った。そして悲しい時もくやしい時も見て元気になってほしいです。

②相手の「気持ち」への支援 ~ D さんを知って~

現地に行ったNさんから、劣化ウラン弾の影響による喉頭ガンの少女「Dさん」が自分たちの絵や写真で元気を出してくれたことを知り、子ども達は自分達が「役だっ

たうれしさ」を感じることができた。

Nさんが伝えてくれた「Dさん」の様子

1週間後、治療が無事終わってアパートで休養しているDに会いに行くことになりました。 実は、前の日にお父さんから「治療は無事終わったのに、ほとんど物も食べない。元気が出 るよう何かいいアイデアはありませんか?」と言われていました。ちょうど、カレンダーが 出来上がっていました。それと、先生からインターネットでヨルダンに送ってもらったみな さんの写真をプリントアウトしたものを持って行きました。

治療前とちがって、Dは真っ青な顔をしていました。でも、カレンダーを見て「これどうやって作ってあるの?日本はいつもこんな花が咲いているの?(貼り絵)」「これって日本語?なんて読むの?なんていう意味?(「道」の習字)」写真を見て「この子どもたちが作ったの?日本の学校ってなんの教科を習うの?」「日本の写真見せて!」とすっかり元気になってきました。「これはあなたの好きな絵が12枚入った、あなたのカレンダーよ。あさってから1年間使えるよ(プレゼントしたのは6月29日、カレンダーの日付は2008年の7月から始まって1年分です)」とプレゼントすると「え?私がもらっていいの?バグダッドのきょうだいたちにも見せる!!写真ももらっていっていい??」と大喜びでした。

実は、他のイラクの子どもにも見せるため、写真をあげるつもりはなかったのですが、しっかり胸にだいているので「返して」とは言えず、プレゼントしました。カレンダーと皆さんの写真はその3日後、無事、治療が終わったDと一緒にバグダッドへ旅立ちました。

○Nさんからの封書にはDさんの描いた絵も入っており、学年の子ども達は、更に元気になって欲しいという願いからもう一度Dさん宛の絵を描き、学級毎の写真も同封し、「がんばって」というメッセージと共に送ったヨルダンのDさんに送った。

4、資金集め活動

(1) 資金としてのアルミカン集め (平成17年度~21年度) (平成17・18年度は1年10ヶ月で 約95000円) 【写真22・23・24】

支援活動をするには「資金」が必要となる。「自分たちの願いを形にするために、直面する課題・障害向き合い・取り組み、これを克服して実現して行く」とことは、「総合的な学習の時間」の大切な中心的なねらいである「生きる力」をはぐくむ大事な側面である。

初年度の17年度、学級の子ども達は話し合って様々な案を出し、各案を検討した結果、 本校の児童会が以前から行っていてある程度の現金収入につながる見通しがもてる「アルミ 缶集め」をすることにした。そして、その方法も大きく二つを考えた。

A、全校のクラスに主旨を説明して協力依頼

これは、こういった海外の問題があることを全校の児童に知ってもらえると共に、 ①このクラスで取り組んでいることと②こういったことに小学生でも働きかけが出来る、という2点を本校の他の児童に知らせられるというメリットもあるところが良い案だと子ども達は考えた。子ども達は主旨を書いた『お願いチラシ』を作成し、給食の時間を使って全校の全てのクラスに教室訪問し、海外の現状と協力へのお願いを訴えた。全校の児童に持ってきてもらう期間は1週間とし、毎朝児童玄関にクラスの子が交代で立って全校のクラスの子達が持ってくるアルミ缶を受け取った。

B、授業時間、また休日なども利用して学校周辺の家庭から集める。

事前に主旨を書いた「お願いチラシ」を配った。子ども達は「資金」もだが、「意欲や勇気」を地域の方々から受け取ることが出来た。(詳細は後述6(1)②で)また、このアルミ缶集めは男女混ざりの班で行うため、男女の仲や学級の中が良くなるというよい影響もあった。子ども達自身も「服を送りたい」という目標があるためと、「大人に働きかけられる」という日頃出来ないことを新鮮に感じ、楽しみながらやっていた。

◎日記より

- ○今日はアルミカン集めでした。私は「アルミカンくれるかな」となぜかドキドキしていました。そして行くとい~ぱいアルミカンが置いてくれてありました。私達は「ありがたい。ありがたや~。」と言いながらもらいました。本当にありがたいと思いました。
- ○「雨の中大変だね。ごくろうさん」と言ってくれま した。その言葉が心のささえに なったのか、がんばって集められました。「家にもまだあるから持ってくるよ」とか

「ちょっとでごめんね」とか「がんばってね」とか「まずしい人たちを助けてあげてね」とか言ってくれる人がいました。この地いきの人たちの協力と、4年1組でまずしい人を助けてあげたいです。

(2) 太陽熱利用チャリティー喫茶店(平成17年度~21年度)

【写真25~30】

本校は、私が環境教育の係になってから、東京の(財)省エネルギーセンターの支援を受けて「省エネモデル校」となり、様々な省エネ活動に取り組んできた。その一環として、冬に南窓から差し込む日差しを集めてお湯を沸かす「太陽熱利用湯沸かし反射板セット」を木工屋さんの協力を得て全校で60セット用意して、各教室に2セットずつ置き、冬場の清掃のお湯に利用し、地球温暖化防止のためにボイラーのガス消費を押さえてきていた。

この「太陽熱利用湯沸かし反射板セット」は冬の晴れた日に窓側に置くと、60~65度にまでなる。この装置を見た子ども達は「これで喫茶店をやって資金集めをしたらどうか」と言い出した。子どもの発想の柔軟さに感心した。「お客さんはどうするのか?」という教師の質問に「参観日に教室でやって家の人にお客さんになってもらえばいい」という案が出た。それでお金をもらうのは厚かましい気もするが、自分たちの活動の願いや主旨をよく説明して、来てもらったらがんばって接待しようということになった。

この活動は「当たり」であった。何より「楽しい」。この分野の活動はややもすると倫理的でストイックに傾く傾向があり、それも大事なことだが小学生の発達段階には合った楽しさもある面必要である。この「太陽熱利用チャリティー喫茶店」は、自分たちの真剣な目標と楽しさの両方を兼ね備えていた。それは単なる楽しさではなく、飾り付けや、メニュー・看板・招待状・室内作り・お茶入れ・ウエイトレス活動など、自分たちの「独創性が発揮できる」という創造的な楽しさである点が、児童の前向きな姿勢をも生み出した。

児童は各係活動を独創的に考え出し、準備し、前日には女子がクッキーを焼いて持って来て、当日は緊張と共に張り切って飲み物を入れ、お客さんの父母・祖父母・いままで活動でお世話になった方に出し、お客さんが多くなったときには「アピール係」がこの活動の主旨や今まで自分たちが勉強してきたこと・海外の貧困状況がどうなっているかなどを、模造紙やビデオを使って、お客さんに飲み物を飲みながら見たり聞いていただいた。収益も、売上と募金を合わせて約1万円ほどになり、子ども達は大きな達成感を感じた。

5、「あるべき援助」について考えよう

活動を進める中で、どこかの場で「あるべき援助」について考え学ぶ場が取れればいいと考えていたが、アフリカ・マラウイ共和国で担任が持って行った「学級で準備した支援物資」の受け取りを断られたことは「なぜ物質援助は時として良くないのか」を学ぶ良いチャンスになった。初めに、その時の現地の学校で言われた「物資を受け取ると、ただでさえ依存心が強く意欲的でない子ども達が、更に依存心が高くなってしまうので受け取れません」という理由を伏せて「断られた学校もあった」と私が話したところ、子どもたちは「エー!何で!?」と驚いた。それまで子ども達にとって「物質援助=良いこと」であったからだった。「だだ物を与える」ことで生ずる問題への直面として、この事実は「本当のあるべき援助とは」を考えるための願ってもない機会だった。

そこで、5年生時に一度図書館資料で「貧困の原因」や「途上国と先進国との貿易」「多国籍企業の働き」などを学習していたが、まずもう一度ここで「貧困の原因」を勉強することにした。教材は担任がマラウイ共和国に行く前の研修で中部 JICA (名古屋) の研修で入手したビデを使用した。これは『あいのりアフリカ』の題名で「緑の革命」や「アグリビジネス」など食糧問題がもたらした負の功罪を解説する物だった。

(1)「貧困の原因」を考えよう

○日本がしもふり牛肉をつくるためにこくもつを買い占めて牛に8kgの穀物を食べさせて1kgのしもふり肉を使うなんておかしい。それならアフリカの人達に8kg食べさ

せたほうがいいに決まってる。これは貧しい国を苦しませるようなものだ。

- ○先進国がちょっとぜいたくをやめて解決することなら、私はもうぜいたくはしたくない
- ○私はこのビデオを見て、見直すべき事をたくさん知りました。地球に住んでいる人々全員が関わっている問題です。なので、興味があるとかないとかそんなんじゃなくて、先進国の人がこのじょうきょうを直すカギを持っているんだと思います。だから一人一人が少しでもいいから何かを始めてくれるといいです。
- ○アフリカが昔のように自分の土地を持ち、幸せになってくれるとうれしいです。
- ★本クラスの子達は約1年前に学校図書館の本で、貧困の原因について学習したが、今回は映像を伴って見たためより深く理解したようである。ここから自分や自分達の責任を見つめ直したことが収穫だった。この学習は次の「マラウイの人々のためになる「本当のあるべき援助って何だろう?」につなげるために有効な学習だった。

(2) なぜ「支援物資」は断られたのだろう?

再度「貧困の原因」を考えた後、「なぜ支援物資が断られたのだろう」という疑問について、話し合う形で考えてみた。先進国の「多国籍企業の動き」などを学んであった子ども達の話し合いは以下の通りだった。

◎「本当の支援」は難しいんだ・・・・ジレンマが子どもを鍛える

教師:どうしてみんなの用意した「ノートや鉛筆やサッカーボール」は受け取りを断られたと思う?

- ○う~ん(しばらく考え、なかなか出ない)
- ○平等に分けられないからじゃない?
- ○これまで、貿易やなんかで先進国の会社に利益を取られたりして、先進国が嫌いなんだよ。
- ○先進国の人を信じたくないんじゃない?
- ○だまされると思うのかな?
- ○「競争心・向上心のために使ったらどうか?がんばったごほうびにする」
- ○「先進国の私達の気持ちを手紙で伝えたら?」
- ○物をもらうと、それで頼っちゃうからじゃないかな。
- ○自分たちで頑張る気がなくなってっちゃうからじゃないかな。
- ○「援助を必要としない国にする」のがやっぱり大事なんじゃない?
- ★子どもたちは最後の方にでた「依存心の元になるから」という意見に納得していき、「援助」という行為の難しさを初めて考えることができた

(3)「本当のあるべき援助」って何だろう?

本クラスにとっては、この「担任のマラウイ行き」は当初から「支援物資を届ける相手の反応」が学習の中心であったため、この問題を考えることこそが最終学習目的と言える。

- ○「援助を制限したらどうか?」
- ○「やる気が出ないのは栄養が充分じゃないからだ。食料こそ援助すべきじゃないか?」
- ○「食料援助」でやる気がでるとは限らない
- ○今度は「食料に頼って」しまうんじゃないか?
- ○先進国に作らされている「商品作物」を買わないようにしたらどうか?
- ○いきなりそんなことをしたら国がつぶれてしまう
- ○じゃあだんだんやったらどうか?
- ○「商品作物」を作っているのは「契約農園」だからそこをやっている先進国 の会社を解散させるべきだ。 (賛成あり)
- ○「昔は農業をしていて、飢えている人はほとんどいなかった」ってビデオで 言っていたから「自給自足の生活」が出来るように応援するのがいい。 (賛成多数)
- ○その「農業の作物」を先進国が高く買ってマラウイを支えてやるのがいい。 (替成多数)
- ○高く買って上げても、国の借金を返すので消えていってしまうんじゃないか?
- ○先進国が借金を減らしたらどうか? (賛成多数)
- ★この学習単元のクライマックスである。難しい問題で、議論は普通6年生のレベルは超えていると思われる。班討論はよく健闘して出したが、その後の「商品作物~自給自足~借

金免除」についてはさすがに"社会的思考の強い子達"の意見交換が精一杯だった。しかし、発言できなくても全員がお互いの意見に耳を傾け、よく集中して考えており、出た意見について同意かどうか何度か挙手で確認をしながら進み、クラスとしての考えをまとめることが出来た。

◎小学校6学年でこの部分まで踏み込めたのは、一般論としてではなく、「自分たちが話し合い、汗を流して資金を貯めた用意した支援物資が断られた」という切実感・現実味・当事者感があったからだったように思われる。自ら行って考えることが大切であると思わされた。

6、意欲を持続させるための取り組み

(1)子ども達への支援・応援(勇気・意欲をもらう) \sim 思わぬ応援・心の交流 \sim ①運送屋さんとの交流 【写真30】

衣類援助で衣類の「送付」に「ヤマト運輸・飯田支店さん」にお願いしたところ、活動主旨を理解してくれて18000円かかるところ「1500円でいい。」と言って送ってくれた。後日、子ども達が出したお礼の手紙を飯田支店が中部本部に知らせたところ

「中部本部」から「飯田支店」に

「いいことをしてくれた。逆に私達が感動させられてうれしかった。今後もこういうことがあったらいくらでも協力する。子ども達に『感動しました。ありがとう』と伝えて下さい。」

この知らせを聞いて子ども達は、この問題は大人の人も重きを置いて大事に考えてくれる 問題であることを、感謝と喜びと共に実感することが出来た。

②「アルミ缶集め」で地域の方が強力と励ましを 【写真31~34】

事前に「主旨を書いたお願いチラシ」を配るため、地域の方は、こういった海外の貧困支援のためという主旨を理解してくれ、「がんばってね」といったようなメッセージを袋の貼り付けてくれたり言葉をかけて下さった。また、回が重なるとこの学級の子ども達のためにアルミ缶を出さずに貯めて待っていてくれる家や事業所も出てきてくれた。また、地域の役員の方が、「そういうためのアルミ缶集めなら君たちの方にあげる」と地域で集まったアルミ缶を持ってきてくれたりした。

また、ある時は、中学校のアルミ缶集めの後だったため、病気の震える手で「これを使って下さい」とメモを書いた上に「貯金箱」を置いてくれてあったおばあちゃんもいた。 ☆こういった社会の賛同・協力は、子ども達に「自分たちがしていることは社会の人達も応援してくれることなんだ」「そういう大事な意味のある問題なんだ」という確信と意欲や応援してもらえたことへの喜びや自信が与えてもらい、この地域の方々とも交流できた。

(2)入ってくる情報を最大限に活かす。

~ミスター・チルドレ 『 タガタメ 』を聴いて~

活動しながら子ども達といろんな情報を持ち寄る中で、担任の私がNGOのある方から環境活動に融資をするミュージシャンによる市民バンク「ap bank」の存在とミスター・チルドレンの『タガタメ』という曲を紹介された。この曲と歌詞は世界の貧困構造の不合理さやそれをなくそうという努力をも考えさせる内容だと思えたので、私は学級の子ども達とこの歌の歌詞について話し合い、『タガタメ』のコンサートDVDを見せた。子ども達は音楽の持つ情感に訴える力を敏感な感性で受け止め、深い感想を書いた。

○「言葉がない。 何も言えない。

きいている間ずっと心ぞうがドキドキして、今もしている。

歌詞が強く心の中に飛びこんできて、この歌詞をどう受けとめるのか、今はわかんないけど、今日の夜とかすごくじっくりこの曲をきいて、歌詞を見て、答えを見つけたい。 こんなに強く深く心に入ってきた曲ははじめてですごく考えさせられる。

何でか分からないけど、すごく悲しい。(S子さん)」

○「DVDを見てぼうぜんとしました。

メンバーの人達が一つになって訴えていました。

ストリート・チルドレンも飢餓の子達も私は「大人がした行動の被害者」だと思います。 桜井さんはDVDのインタビューで自分の考えを持っていてすごかった。「大人はこの 問題では期待できないのでは」と思っていたけど、改め考え直しました。

「大人でもちゃんとした人はたくさんいる」と。」(I 子さん)

☆この学習の良かった点は「意欲」と「決意」があがったこと。音楽が情感に働きかける 力は大きなものがあり、子ども達はこれまでの知識と活動・学習から感じていたことを 内側で情感的に統合させ、活動への意欲を更に上げていった。

7. 子ども達の意識・価値観の変化

小さなことでもいいから途上国に支援する、多くの人に広げる等、活動を行う上で大切な ことはたくさんあるが、その中の一つ、「活動を行った子ども達自身がどう変わったか」は ある意味一番大事な面であると思われる。

(1)価値観の変化

子ども達が書いた活動の感想文

○「「幸せに感じるとき」のアンケートを書きました。私は4年生の時もしこのアンケートを書いていたら、今日書いたよりたぶん書くことが少なかったと思います。

それは5年生から勉強してきた「貧しい国」のことがあるからです。4年まで当たり前だと思っていたというか当たり前だとかさえも考えなかったことが、今では「幸せ」と感じるように変わって来ています。」(18年度 6年終了時に)

○『私たちも助けられる』

「あのボランティアしている人が言っていた、「援助して助けているのではなくて、こっちも助けてもらっている。」というところで「あっ、私達も助けてあげているんじゃなくて、こっちも助けてもらっているんだ」と気づきました。

笑顔がすごいと思いました。貧しいからこそ、私達とはちがう「宝」を持っているんだと思いました。」(M子)

○『私たちにはないものを持っている』

「私達先進国にいる人は何かを始めなければ行けないんだと強く思いました。

マラウイの働く女の子の写真は服もあまり良くなくてかわいそうでした。でもその子は、自分だけでなく他の人を温めてれるような笑顔でした。

私はこの写真を見て、私には出来ない「笑顔」だなと思いました。いく貧しくても 私達より上のとてもいい「持ち物」をもっているんだなと思いました。

そしてこの「持ち物」が3秒に1つ消えてしまうなんて本当にもったいないことです。だからこの「持ち物」が世界中に広がってくれればいいなと思いました。

私は卒業しても大人になっても、ずっとこの活動を続けていきたいです。」(S子)

(2)集団の信頼度が高まり、団結が高まる

◎6年最後の授業参観で「ストリート・チルドレンの劇」をやるために練習した本番の日の日記

~一緒にやっている自分達を 「信頼し合い」「好きに」なっていく~

○「本当に今日の劇は、本当に良かったです。みんなすごいなーと思いました。 アドリブとかも・・・。朝の練習も1名も遅れることなくそろったんです。 何も言ってないのに、男子は自分からサングラス 持ってきてくれたり、バットを 持ってきてくれたり。「みんなやる気あるなぁー」「決まったことはちゃんとやっ てくれるなぁー」とすごく思いました。

みんな、ありがとう!!!!!!

(3)考え方・関心・姿勢の変化

○卒業文集より

「 昔はぼくは、別にクラスの話し合いも特に参加せず、意見も聞かないような感じで した。それは一部の人にまかせればいいという気持ちから出てたと思います。

でも、五年の時、総合の話に耳をかたむけてみると、自分なりに考えると「それは違うんじゃないかなぁ」ということを思い始めました。それで意見などをしてみるとだんだん楽しくなり、ふつうの授業の意見も楽しくなってきました。総合をやることで、意見をする楽しさを教えてくれました。しかも、みんなで協力できる活動なのでクラスの仲もよくなりました。

今までこういう世間の問題は知らなかったし、知ろうとも思わなかったので、この問題を知って世間の問題にも興味が出てきました。それからこんなに人を助けたいと思ったのは、総合学習の貧困問題が初めてでした。テレビで貧しい子どもなどを見てると、この人達を救いたいととても思いました。

総合学習はいいことづくしでした。これからも貧困でなくなる人が一人でも減ればいいと思います。」 (18年度 卒業時 T君)

(4) すさんでいた子が穏やかになったり意欲を発揮する

①すさみから立ち直り意欲的になったHさんの例

(本校で2度目、平成19・20年度に5・6学年担任した児童)

Hさんは、私が担任として持つ前年度の4年生の時、足の悪いK君を仲間数人で掃除用具入れの中に閉じこめ、外から用具入れをバンバンたたく、という典型的ないじめのような行動もしていた。担任した5年1学期は言葉や表情にも険があった。良く聞いてみると、両親とも仕事が忙しく内面に寂しさを抱えていた。このHさんはこの「海外貧困問題・支援活動」に徐々に熱心に入ってきた。活動をし、表情も言葉も柔らかくなって来た5年生の2学期の個別懇談会では、母親が「先生、あの子この頃落ち着いて来ました。」と話し、そしてチャリティー喫茶店を行う相談の日の5年の12月の日記は、とてもいい内容であったため、担任の私が学年通信に載せた。

今日は学年集会で今度の2月の授業参観日にきっさ店をやる提案が出ました。早くお金を集めて苦しんでいる人が少しでも助かったらいいと思います。いっぱいえんじょしても少しの人しか助からないと思うけど、誰も助からないよりいいので、いっぱいしたいです。私が前から思っていたのが、世界はなぜみんなが同じラインに立てないのかということです。同じ仲間なのだから、平和な人と貧しい人がいてほしくないと思います。みんなが手をつなぐからこそ世界は一つになる。みんなが平等でなければいけない。

☆この学年通信に載った日記は学年の多くの子ども達の支持を受け、Hさんは自信を 深めていった。この後の活動も熱心に行い、この5学年度末には児童会のある委員 会の副委員長にも立候補して就任し、友達も助け、熱心に活動するようになった。

②自尊感情を取り戻したN子さんの例

(本校で最初に、平成17・18年度に5・6学年担任した児童)

「先生あの子、この頃『私なんか・・・・』って言わなくなって来たんです。」これは5年生時の12月の個別懇談会でのN子の母親が言った言葉。N子は気立てがよい子だが教科学習能力は劣る面があり、自分に自信が持てないでいた。しかし、5学年になって総合的な学習の時間に始めたこの「海外支援活動」に人一倍一生懸命取り組み、日曜日でも1人でアルミ缶集めをしたり、衣類集めもがんばり、感想文なども良いものを書いて来た。

担任の私はそのN子の努力を学級の朝の会や総合の時間にクラスに知らせたり、学級通信でN子の感想文を紹介したりした。自信を持ち始め、生き生きとし始めたN子は、チャリティー喫茶店を行う時には、喫茶店会場になる学級のいろんなところにかぶせて隠すための「カーテン生地の端切れ」を親戚のカーテン屋さんから調達してき

てくれた。このおかげで教室はずいぶんと喫茶店らしくなり、N子はみんなに感謝され更に自尊感情を高めて活動に意欲を高めていき、学習も意欲的で前向きになった。

(5) 学級の約束事 ~自分達の生活にどう反映させるか~

○学習も支援活動も大切だが、それを行っている自分の生活意識や態度を棚に上げておいて は何もならない。そこで自分たちの生活をどう考えるのかを話し合った。

◎クラスの「約束ごと」(学級に掲示)

「給食を残さない」

「ものを無駄にしない」

「恵まれていることに感謝する」「学校に来れることを大切にする」

ビデオの「児童労働」で学校に行けずに働く子どもを見て自分達の価値観を大きく揺さぶられ、真剣に考え、話し合った子ども達は「今自分の生活の中でできること」として、上記のことを自分達のクラスの約束にし、心がけていった。子ども達は、自分達が豊かな物に囲まれて「五感の快」ばかりを追い求め、その奥にある「大事なもの」に目隠しをかけられている"先進国病"のようなものに取り込まれていることに気づいていった。

(6)子ども達の変化から

○上の事例には途上国に(言葉が悪いが)「与えた」はずの自分達が、逆に価値観の変化ややりがいや意欲や団結といったものを「与えられる」という不思議な構図が見える。しかしよく考えてみるとこれは不思議ではない。私達は大人も子どもも、この日本で"生存"という点では不自由のない環境の中で生きている。しかし溢れる物や情報に翻弄され、いつしかその中で「"生を与えられた人間"としての自分にとって本質的に大事なもの(気持ち・考え方・価値観・姿勢・習慣など)」を本末転倒的に見失い始めている。私達は身の回りに私達の「快」のための物質に囲まれながら、同時に環境悪化や飢餓・貧困に苦しむ人達の存在も知っている。それゆえ暗にでも"閉塞感"も抱えてしまう。こうした中で貧困問題に出会った子ども達は、自分の中で本当に納得が出来る大事な感情を元に活動することに出会えたと言える。そしてその感情と活動は子ども達に、考え方・価値観を本来的なところに立ち戻させたり、生きる意欲を与えた。他のためにと「与えた」自分達が、豊かな物に目隠しをされた閉塞感のある社会の中に生きるが故に、結果「与えられ救われた」ように思われる。

写直資料

- 1 (4) ①フジテレビ『世界がもし1
- 00人の村だったら』をみんなで観る 【写真1】
 - ②『明日こそ子ども達が・・』を音楽会で【写真2】



実を乗り出して真剣に観る子ども達



リボンを手に映像もつけて発表

2, (1) 「ストリート・チルドレン宿泊体験」



平成16年度 学校二階外の渡り廊下で 【写真3】

TO A STATE OF THE STATE OF THE

平成17年度 玄関外 【写真4】

【写真5】

2, (2) 「働く子ども体験」【写真6】



平成19年度 この時はおにぎり1個



2時間半休みなしでバテバテに。

3, (1)待望の衣類援助



【写真7】 衣類援助の時、子ども達はこの時一番良い表情を見せる



【写真8】

3, (2) ①マラウイ共和国に援助物資を届ける



支援物資を手渡す 【写真9】



喜んでくれたマラウイ共和国の生徒【写真10】

②その他のマラウイ共和国学習



フォトランゲージ【写真11】



「貧困の輪」の学習【写真12】

③ルウェレジ中高等学校への 「エイズ孤児支援」



「マラウイ・ボックス」の学習【写真13】

ビーズブレスレットを販売【写真14】→



④マラウイ「VCTセンター」建設とTV会議



完成した「VCT (エイズ予防) センター」 【写真 1 5 】



マラウイとのTV会議(JICA駒ヶ根で) 【写真16】

(3) 東ティモール支援



サッカーボールとビブスを用意【写真17】



難民キャンプの子達に【写真18】

東ティモールの子ども達【写真19】



(4)紛争国イラクへの支援活動学習

イラクの子ども達に送った絵【写真20】

COVE

元気を出してくれたDさん【写真21】

4, (1) 資金としてのアルミカン集め



学級みんなでアルミ缶集め【写真22】



事前に主旨を書いたお願いチラシ配り【写真23】



全校からアルミ缶協力【写真24】

4, (2)太陽熱利用チャリティー喫茶店



参観日に教室でチャリティー喫茶店【写真25】



チャリティー喫茶店の記事【写真26】



太陽熱利用湯沸かし反射板セット【写真27】



監督係が当日の動きを説明【写真28】



Table 1 of the second of the s

アピール係・当日主旨を発表【写真29】 アピールを熱心に聞いて下さる父母【写真30】

6、意欲を持続させるための取り組み (1)子ども達への支援・応援(勇気・意欲をもらう)

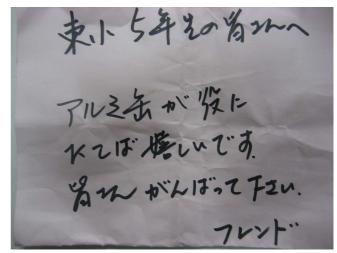


衣類送付でヤマト運輸さん。16000円かかるのを「1500円でいい」【写真30】

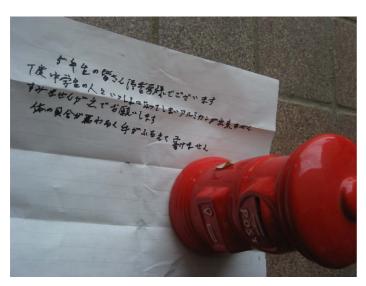


地域の方「そういう活動のためなら君たちに あげる」 【写真31】





アルミ缶集めの時、袋に書かれた地域の方々のこの言葉が子ども達を勇気づける【写真32】



アルミ缶集めの時に一人暮らしのおば あちゃんの家にあったメッセージ

「5年生の皆さん、ご苦労様でございます。丁度中学の人といっしょになってしまい、アルミカンが出来ません。すみませんがこれでおねがいします。体の具合が悪くて手がふるえて書けません」

と、メモと貯金箱が置かれてあった。 子ども達は「自分たちが取り組んでいる 問題への人々の願い」を強く感じた。

【写真33】

2、実体験的学習

(1) 「ストリート・チルドレン宿泊体験」



【写真34】



ストリート・チルドレンの気持ちを実感することになった屋外での宿泊体験 この体験の「過酷さの実感」がその後の意欲の元となってこの一連の活動が展開された